

ハイスラ語の語彙的接尾辞について

ー 身体部位接尾辞の使用に関する諸観察 ー

ワットウクンプ テロ

(Tero Vattukumpu)

京都大学大学院 (日本学術振興会特別研究員) ・ terova@gmail.com

キーワード：ハイスラ語、語彙的接尾辞、身体部位接尾辞、意味役割

1 はじめに

本稿では、最近のフィールド調査で集めたデータに基づいて、ハイスラ語 (Haisla) で見られる語彙的接辞 (lexical affix) という派生接辞の一種である身体部位接尾辞の使用に関して現段階で観察できたことについて論じる。身体部位接尾辞は述語に付き、身体の各部位の意味をもたらす接尾辞のことである。ハイスラ語には、身体部位を表す自由形態素もある¹。身体部位接尾辞の例を集めている目的は次の通りである：

- A) 先行研究で挙げられている身体部位接尾辞が実際に使われているかどうかの確認。
- B) 身体部位接尾辞は先行研究で指摘されているような形態音韻論的变化 (いわゆる end effect) を引き起こすかどうかの確認。
- C) 身体部位接尾辞はどのような意味で使えるのかなどの確認。

前述のデータ採取目的を踏まえて、本稿では次の4つを明らかにすることを目的とする：

- D) 先行研究で挙げられている身体部位接尾辞は全て筆者のインフォーマントが使えるわけではないこと、先行研究の記述と違う意味で使う場合があること、先行研究で見えない身体部位接尾辞を使っていること。また、その理由についての私見も述べる。
- E) インフォーマントが一部の身体部位接尾辞を使った際に、先行研究の記述と違う形態音韻論的变化が生じる例があること。
- F) ハイスラ語の身体部位接尾辞が担う意味役割は道具 (instrument) が不可能なようであること。
- G) 先行研究では、変化を伴う他動詞に身体部位接尾辞が付いた時に再帰的な使い方しかないとし唆されているにも関わらず、実際には非再帰的な使い方もあること。

本稿の内容は次の流れで進めていく：

- ・ 先ず第2章では、ハイスラ語の概要を紹介し、本稿で使われる語彙的接辞と end effect という用語について説明する。
- ・ 第3章では、本稿のテーマの背景と先行研究及び本稿で扱うデータなどについて述べる。
- ・ 第4章では集めたデータを示し、第5章では、データについての考察を行う。
- ・ 第6章で考察をまとめ、第7章では、残る問題点と今後の課題について述べる。

¹ 本稿で示すデータでも分かるように、身体部位接尾辞は身体部位を表す自由形態素よりジェネリックな意味を持っている。

2 ハイスラ語について

ハイスラ語は、カナダのブリティッシュ・コロンビア州でハイスラ族という先住民に話されている危機言語であり、ワカッシュ語族の北ワカッシュ語派に属している。2018年8月の時点で、ハイスラ語の話者数は、87人であった (Vattukumpu 2018: 42)。話者は全員ハイスラ語と英語のバイリンガルで、ほとんどブリティッシュ・コロンビア州の中央部に所在しているキタマート村 (Kitamaat Village) に在住している (地図1)。



地図1: キタマート村の所在地

ハイスラ語は、基本語順が述語—主語—目的語であり、音韻論的・形態論的な体系が複雑で、複統合的な言語であると記述されたことがある (Bach 1995: 13)。

ハイスラ語の音韻体系や人称接語及び本稿で採用されている表記法については、本稿末尾に付属参照資料を添付している。次に、本稿での議論を進めるにあたり、説明しておくべき特徴として、語彙的接尾辞といわゆる *end effect* という形態音韻論的現象について示す。

2.1 語彙的接辞について

語彙的接辞は、具体的で、且つ、語彙的な意味をもつ拘束形態素 (Muro 2008: 6, Kazama 2011: 56 など) であり、Mithun (1997: 357) によって「語根のような接辞」とも呼ばれている接辞のことである。ハイスラ語の語彙的接辞は全て接尾辞であり、意味的に動詞や名詞に相当するものもあれば、副詞的表現などに相当するものもある。身体部位接尾辞は、語彙的接尾辞の1種類である。語彙的接尾辞は、本稿のグロスで LS と表記している。

また、ハイスラ語の接尾辞には、最初の音素が脱落する異形態をもつものがある (Bach 1990b: 63, Bach 2001a: 55-56)。このような接尾辞の最初の音素は、先行研究 (Bach 1990b: 63) に倣って、ブラケット ([]) の中に入れている。

2.2 *end effect* について

ハイスラ語の接尾辞は、普通接尾辞 (plain suffixes)、有声化接尾辞 (voicing suffixes) と声門化接尾辞 (glottalizing suffixes) の3種類に分けることができる (Bach 2001a: 57-60)。有声化接尾辞と声門化接尾辞は、それらが付く語基 (base) の末子音を一定のパターンに従って別の子音に変えることがある。語基の末子音がこのように接尾辞によって変わることを先行研究では *end effect* と呼んでいる (Bach 2001a: 57)。これに対して、普通接尾辞は *end effect* を生じさせることがない。*end effect* によって変わる子音は、無声の破裂音と破擦音及び幾つかのその他の子音である。

本稿では、先行研究でも使われている記号 (Bach 2001a: 57-58) を採用し、普通接尾辞をハイフン (例: -t PAST) で、有声化接尾辞をイコール (例: =il ‘室内で’) で、声門化接尾辞をハイフンとビクリマークの組み合わせ (例: -liḫd DES) で表示する。Bach (2001a: 58) は、有声化接尾辞と声門化接尾辞による *end effect* を次の表1のようにまとめている。

表 1 : Bach (2001a: 58) による end effect のまとめ

語基末の子音	有声化接尾辞の end effect	声門化接尾辞の end effect
無 声 破 裂 ・ 破 擦 音	-p	-b
	-t	-d
	-k	-g
	-k ^w	-g ^w
	-q	-ḡ
	-q ^w	-ḡ ^w
	-c	-z
	-λ	-ḷ
そ の 他 の 子 音	-s	-y / -z
	-x	-n
	-x ^w	-w
	-x̄ ^w	同上
	-l	-l
	-l	-ḷ
	-m	-ṁ
	-n	-ṇ

表 1 で見て取れるように、無声破裂音と無声破擦音は、有声化接尾辞によって有声化され、声門化接尾辞によって声門化される。これに対して、その他の end effect を受ける子音は多少異なる変化のパターンに従う。Vink (1977: 13) によれば、Bach (1990: 58) が挙げしていない幾つかの子音も end effect を受ける。この子音とその end effect は次の表 2 にまとめている：

表 2 : Vink (1977: 13) による更なる end effect を受ける子音

語基末の子音	有声化接尾辞の end effect	声門化接尾辞の end effect
-x̄	-x̄	-x̄?
-w	-w	例無し
-y	-y	-ỵ

筆者がこれまでに集めてきたデータの中で出てきた普通接尾辞と end effect の例を出す：

- (1) a. húsa + -λ ⇒ húsaλ
 ‘読む’ FUT ‘読む (未来形)’
 b. húsa + -t ⇒ húsat
 ‘読む’ PAST ‘読んだ’
- (2) a. wáp- + =ad ⇒ wábád
 ‘水’ ‘持つ’ ‘水を持つ’

- b. $\text{gux}^w\text{-}$ + =ad \Rightarrow $\text{gug}^w\text{ád}$
 ‘家’ ‘持つ’ ‘家を持つ’
- (3) a. yus- + $\text{-!i\ddot{x}d}$ \Rightarrow $\text{yúci\ddot{x}d}$
 ‘飲む’ DES ‘飲みたい’
- b. ká!- + $\text{-!i\ddot{x}d}$ \Rightarrow $\text{káli\ddot{x}d}$
 ‘寝る’ DES ‘寝たい’ / ‘眠い’

(2b) で end effect の対象となっているのは、 gux^w の基底形である $\text{//guk}^w\text{//}$ である。ハイスラ語の無声の軟口蓋破裂音と口蓋垂破裂音 ($/k/$, $/k^w/$, $/q/$, $/q^w/$) は、語末と子音の前で同器官的摩擦音 ($/x/$, $/x^w/$, $/\bar{x}/$, $/\bar{x}^w/$) に変わる。

3 研究目的とデータ及び先行研究について

最終的にはハイスラ語の記述文法を作成することが課題であるが、その一環として、ハイスラ語の語彙的接尾辞の目録を作成することを目的としている。この目的のために、語彙的接尾辞のデータの体系的な採取を最近のフィールド調査で始めている。第一段階としては、身体部位接尾辞のデータを集め、分析する。現段階では、集められた身体部位接尾辞のデータを一先ず整理しており、今後の分析や調査の方向性を考えているところである。

本稿で示すデータは全て、2019 年 11 月にキタマート村で聞き出し (elicitation) によって集め、1 人のインフォーマントから得たものである。このインフォーマントはハイスラ語を第一言語 (の 1 つ) として習得している。

管見の限りでは、出版されたハイスラ語の先行研究の中には、身体部位接尾辞を網羅的にまとめたものはないが、未出版の先行研究で唯一身体部位接尾辞のリストが見つかるのは、表 3 に示す Bach (1990: 114-115) である：

表 3 : Bach (1990: 114-115) によるハイスラ語の身体部位接尾辞のリスト (基底形)

身体部位	接尾辞	身体部位	接尾辞
頭	$\text{-\acute{c}uaqia/-qia/-s\acute{g}em/-sem/-zem}$	手/腕	$\text{-\acute{k}ana}$
顔	$\text{-em/-s\acute{g}em/-sem/-zem}$	手/手の指	$\text{-[s]\acute{k}ana}$
額	-[g]iu	腹	-\lambda ems
目	-sdu	腰/体の真ん中	$\text{-u\acute{y}u}$
耳	=atu	股間/性器	$\text{=a\acute{g}i/=aq}$
鼻	=isba	陰茎	$\text{-se\acute{g}u}$
頬	$\text{=m\acute{y}a/-biu}$	尻	$\text{-!\acute{x}d}$
口	$\text{-\acute{x}d}$	膝 (knee/lap)	$\text{-\acute{x}da\acute{m}ua}$
歯	-ksi'a	脛	$\text{-\acute{p}ig/-\acute{p}ik}$
顎	$\text{-!\acute{x}\lambda aksi}$	足 (foot)	$\text{-[k]sis/-[x]zis/-sis}$
首	$\text{-!\acute{x}u}$	足の指	-sis
襟首	$\text{-sge\acute{n}i/-sen(i)}$	体(全体)	$\text{-sen/-[g]it/-\acute{k}en}$
胸	=bu	体の一側面	$\text{-\acute{k}ut}$
肩/腕	$\text{-\acute{x}ina/-xena}$		

その他、ハイスラ語の身体部位接尾辞を含む語の例は、例えば幾つかの辞書 (Lincoln & Rath 1986a, 1986b; Bach 2001b) や論文 (Vink 1977, Bach 1995) に所々見られる。本稿では、表 3 に挙げている接尾辞以外に、身体部位接尾辞があるかどうかを確認する目的で、Bach (1990: 114-115) 以外の先行研究を参照していないが、Bach (1990: 114-115) が挙げしていない身体部位接尾辞の例として、以下の 1 例が挙げられる：

- (4) *λupqes*
 ‘burn one’s tongue’ (Bach 2001b: 25)

(4) の例では、*λup-* (‘火傷する’) という語根 (Lincoln & Rath 1986b: 493) に、普通接尾辞である身体部位接尾辞 *-qes* (‘舌’) が付いていると考えられる。この例については、インフォーマントに尋ねた。インフォーマントによれば、(4) の *-qes* は、‘舌’ だけではなく、口の中全体を表す接尾辞である。*-qes* の詳細な記述については今後の課題である。

表 3 で示した身体部位接尾辞に関して、実際に文の中で使われる例は、先行研究からは観察されない。そのため、身体部位接尾辞を実際に使う時の詳細については不明瞭な点が多い。これもまた、第 1 章の最初に述べた目的 (A-C) でデータを集める理由である。

しかし、先行研究における身体部位接尾辞を含む語の例から、身体部位接尾辞について全く何も言えないわけではなく、少なくとも次のことが言えるかと思われる。表 4 にそれを示す。

表 4：先行研究に基づくハイスラ語の身体部位接尾辞の特徴

特徴	そう考えられる理由
1. 他動詞にも自動詞 (状態動詞) にも付く。	⇒ 次のような例があるから： a) <i>mexcuaqia</i> ‘to punch in the head’ (Bach 1995: 19) b) <i>k’wénciu</i> ‘to have a wrinkled forehead’ (Lincoln & Rath 1986a: 239)
2. 身体部位接尾辞が付いた変化を伴う他動詞は再帰的にしか使えなさそうである。	⇒ a) 英訳にはよく <i>one’s / oneself</i> が含まれている。 (他の例: <i>kúpebu</i> ‘to break one’s collar bone or ribs’ (Lincoln & Rath 1986a: 215)) b) Lincoln & Rath (1986a, 1986b) の辞書では、再帰的にしか使えないかどうかについてかなり明確に記述されている。そこで挙げられている身体部位接尾辞を含む他動詞のうち、再帰的以外の使い方があるとされたものは、 <i>q’weq’weλlemsá</i> (‘to scratch an itchy belly (one’s own or sb. else’s)’) (Lincoln & Rath 1986b: 325) のような変化を伴わないものばかりである。

4 採取したデータ

身体部位接尾辞の全パラダイムのデータを集めるためには、表 3 で挙げられている身体部位接尾辞と、*yes-* (‘(何かで)～を叩く’) という語根との組み合わせが容認可能かどうかをインフォーマントに聞いてみた。さらに、各身体部位接尾辞との組み合わせについては聞けなか

ったが、身体部位接尾辞が付いた他の語根の例も集められた。全ての語根を (基底形で) 表 5 に示す：

表 5：身体部位接尾辞が付くことを確認できた語根 (筆者データに基づく)

語根	意味	語根	意味
<i>yes-</i>	‘叩く’	<i>q^wet-</i>	‘くっ付く’
<i>mex-</i>	‘(拳で)殴る’	<i>muk^w-</i>	‘結び付ける’
<i>demk^w-</i>	‘蹴る’	<i>λup-</i>	‘火傷する’
<i>cem-</i>	‘指す/刺す’	<i>kup-</i>	‘細長い物を切る/ 折る/壊す’
<i>duq^w-</i>	‘見る’		
<i>q^wet-</i>	‘痒い’		

yes- と身体部位接尾辞の組み合わせの例は、=*u* (3.MED.SBJ) と =*enλ* (1SG.OBJ) という人称接語を使って、‘彼(女)(MED)が(何かで)私の～(身体部位)～を叩いた’という文の形で、表 3 に挙げられている身体部位毎にそれぞれの接尾辞を聞いて集めたが、人称接語無しの語基またはそれ以外の形で出てきたものもある。表 6 にそれを示す。

表 6：インフォーマントから得た *yes-* (‘(何かで)～を叩く’) と身体部位接尾辞の例

身体部位	例	身体部位	例
頭	yezanúduenλ / yečuauduenλ	手/腕	yečkanauduenλ / yeskanauduenλ
顔	yesemduenλ	手/手の指	yečkanauduenλ / yeskanauduenλ
額	無し	腹	yesixlemduenλ
目	yecdúduenλz k ^w aλáuaλu	腰/体の真ん中	yesúyuienλ
耳	無し	股間/性器	yezági- / yezağuduenλ
鼻	yezisbúenλ	陰茎	yeceğú-
頬	yezemya-	尻	yečexdúduenλ
口	yeságamduenλ	膝 (knee/lap)	無し
歯	yeseksgenduenλ	脛	yespig-
顎	yezeλláksi-	足 (foot)	yecisduenλ
首	yezeχuduenλ	足の指	無し
襟首	無し	体(全体)	無し
胸	yezebúduenλ / yečesganuduenλ	体の一側面	無し
肩/腕	yečesganuduenλ		

先行研究も参考にしながら、表 6 に出ているデータとインフォーマントから得たコメントからは、幾つかの観察ができる。これらの観察を詳しく見ていく前に、身体部位の自由形態素について集められた例文を参考まで以下の表 7 に示し、表 6 のデータについての説明を幾つか加える：

表 7: インフォーマントから得た *yes-* (‘(何かで)~を叩く’) と身体部位の自由形態素の例

身体部位	例 ²
頭	<p>yesáu híxtia’enc / híxtigenc</p> <p>yes -a =u híxti -a’enc / híxti -genc</p> <p>叩く -FORM =3.MED.SBJ 頭 -1SG.POSS.MED 頭 -1SG.POSS.PROX</p> <p>‘彼(女)(MED)は私の頭を叩いた。’</p>
顔	<p>yesáu ġuġwemía’enc / ġuġwemígenerc</p> <p>yes -a =u ġuġwemí -a’enc / ġuġwemí -genc</p> <p>叩く -FORM =3.MED.SBJ 顔 -1SG.POSS.MED 顔 -1SG.POSS.PROX</p> <p>‘彼(女)(MED)は私の顔を叩いた。’</p>
目	<p>yesáu ġeġesgenerc</p> <p>yes -a =u ġeġes -genc</p> <p>叩く -FORM =3.MED.SBJ 目 -1SG.POSS.PROX</p> <p>‘彼(女)(MED)は私の目を叩いた。’</p>
耳	<p>yesáu pispíua’enc / pispíugenc</p> <p>yes -a =u pispíu -a’enc / pispíu -genc</p> <p>叩く -FORM =3.MED.SBJ 耳 -1SG.POSS.MED 耳 -1SG.POSS.PROX</p> <p>‘彼(女)(MED)は私の耳を叩いた。’</p>
鼻	<p>yesáu xumáxgenerc</p> <p>yes -a =u xumáx -genc</p> <p>叩く -FORM =3.MED.SBJ 鼻 -1SG.POSS.PROX</p> <p>‘彼(女)(MED)は私の鼻を叩いた。’</p>
頬	<p>yesáu ’umíagenc</p> <p>yes -a =u ’umía -genc</p> <p>叩く -FORM =3.MED.SBJ 頬 -1SG.POSS.PROX</p> <p>‘彼(女)(MED)は私の頬を叩いた。’</p>
口	<p>yesáu sémsa’enc / sémsgenc</p> <p>yes -a =u séms -a’enc / séms -genc</p> <p>叩く -FORM =3.MED.SBJ 口 -1SG.POSS.MED 口 -1SG.POSS.PROX</p> <p>‘彼(女)(MED)は私の口を叩いた。’</p>
歯	<p>yesáu ġígenerc</p> <p>yes -a =u ġíg -e -genc</p> <p>叩く -FORM =3.MED.SBJ 歯 -EP -1SG.POSS.PROX</p> <p>‘彼(女)(MED)は私の歯を叩いた。’</p>

² ハイスラ語の所有接尾辞は所有者の人称以外に、所有されているものの位置に関するダイキシス情報を含んでいる。表 7 に示してある例文において身体部位を表す自由形態素に付いている所有接尾辞は、所有者が 1 人称単数で所有物 (=身体部位) のダイキシスが近称 (PROX) と中称 (MED) の両方が出ている。話し手の身体部位のダイキシスが必然的に近称であると考えられるにも関わらず、インフォーマントは両方が使えると述べた。また、訳し方の違いとしては、近称の方を「my ~」と訳し、中称の方を「me in/on the ~」と訳す必要があるとインフォーマントに強く指摘された。片方の例文しか出ていない場合にもう一方が言えるかどうかは不明である。「膝」の例では、中称の方が自然な言い方に聞こえるとの報告があった。

顎	yesáu kuáḡgenc yes -a =u kuáḡ -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 顎 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の顎を叩いた。’
首	yesáu quḡwēnigenc yes -a =u quḡwēni -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 首 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の首を叩いた。’
襟首 ³	yesáu ’uáskanigenc yes -a =u ’uáskani -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 襟首 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の襟首を叩いた。’
胸	yesáu teḡebuáa’enc / teḡebuágenc yes -a =u teḡebuá -a’enc / teḡebuá -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 胸 -1SG.POSS.MED 胸 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の胸を叩いた。’
肩	yesáu ’ukínagenc yes -a =u ’ukiná -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 肩 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の肩を叩いた。’
手/腕	yesáu há’isua’enc / há’isugenc yes -a =u há’isu -a’enc / há’isu -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 手/腕 -1SG.POSS.MED 手/腕 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の手/腕を叩いた。’
手の指	yesáu xīxēkskani’a’enc / xīxēkskani -genc yes -a =u xīxēkskani -a’enc / xīxēkskani -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 手の指 -1SG.POSS.MED 手の指 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の手の指を叩いた。’
腰	yesáu tikibuágenc yes -a =u tikibuá -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 腰 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の腰を叩いた。’
女性器	yesáu ’úaḡaia’enc / ’úaḡaigenc yes -a =u ’úaḡai -a’enc / ’úaḡai -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 女性器 -1SG.POSS.MED 女性器 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の女性器を叩いた。’
睾丸	yesáu muḡwēdelígenc yes -a =u muḡwēdeli -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 睾丸 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の睾丸を叩いた。’

³ 表7の身体部位を表す自由形態素の例文は原則として、所有接尾辞のみを伴う名詞句として直接目的語の位置に生起するが、「襟首」の例文においてのみ、’uáskanigenc (‘私の襟首’) の前に位置や場所などを表す前置詞である *la* を置いても言えるとインフォーマントから報告があった。

尻	yesáu mengačígenc yes -a =u mengačí -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 尻 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の尻を叩いた。’
膝 (knee)	yesáu ‘uḡdámua’enc / ‘uḡdámugenc yes -a =u ‘uḡdámu -a’enc / ‘uḡdámu -genc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 膝 -1SG.POSS.MED 膝 -1SG.POSS.PROX ‘彼(女)(MED)は私の膝を叩いた。’
脛	yesáu ‘upigaa’enc yes -a =u ‘upiga -a’enc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 脛 -1SG.POSS.MED ‘彼(女)(MED)は私の脛を叩いた。’
足 (foot)	yesáu ḡúḡ ^w ia’enc yes -a =u ḡúḡ ^w i -a’enc 叩く -FORM =3.MED.SBJ 足 -1SG.POSS.MED ‘彼(女)(MED)は私の足を叩いた。’

次に表 6 のデータに関して、幾つかの追加説明を指摘する：

追加説明 1：

yes- の語根末の /s/ が別の子音に変わっているものはほとんど end effect による変化であるが、中には /s/ + /s/ → /c/ という別の規則 (Bach 2001a: 55) による変化もある。(例えば、yes- + -sdu → yecdu-)。また、「鼻」の身体部位接尾辞の例では、接尾辞の最後の /a/ が主語人称接語 =u の前で脱落していると考えられる。(形態素境界で生じ得る現象である (Vink 1977: 128)。) その他にも、同じ現象により母音が脱落しているものがある可能性があると考えられる (例えば、「目」の身体部位接尾辞である -sdu の最後の /u/⁴)。

追加説明 2：

「目」の身体部位接尾辞の例では、叩く道具が出ている：

- (5) yecdúduenłz k^waḡláuaḡu
yes -sdú -d⁵ =u =enł =s k^waḡláu -aḡu
叩く -LS.目 -INCH =3.MED.SBJ =1SG.OBJ =PREP 木棒 -DEIX.MED
‘彼(女)(MED)は木棒で私の目を指した。’

道具を表す名詞句を先行する前置詞 *his* は、// =s // という前接語 (enclitic) に接語化しており、

⁴ 「目」の身体部位接尾辞の例で -sdu の後ろには、本稿で起動動詞 (inchoative suffix) としている接尾辞 -[u]d が付いている (cf. 観察 2)。「目」の身体部位接尾辞の中の「-sdú-」の部分においては、起動接尾辞が -d という異形態で出現しているのか、起動接尾辞が -ud という異形態で出現し、且つ、-sdu の最後の /u/ が脱落しているのかが不明である (cf. 追加説明 2 の脚注 5)。

⁵ 脚注 4 で述べたように、(5) の「-sdú-d」の部分で「-sd-úd」とも分析できるという可能性を除外できないが、Bach (2001a: 56) によれば、ハイスラ語で冒頭の母音が脱落する異形態を持つ接尾辞の場合に、母音が脱落した異形態は原則として母音及び生節共鳴音の後で出現する。そのため、(5) の逐語訳において「-sdú-d」という分析の方が正しいという可能性が高いと判断しており、そのように分析している。以下の例でもこの原則に従って起動接尾辞の異形態を分析している。

/s/ が 阻害側面音の後で /z/ に変わるという規則 (Vink 1977: 129) に従って、/=z/として述語に付いている。

追加説明 3 :

「腰」の身体部位接尾辞の例で、主語人称接語は他の例と違って、=*u* (3.MED.SBJ) ではなく、=*i* (3.DIS.SBJ) となっている。

次に身体部位接尾辞の使用に関する 6 つの観察を示す :

観察 1 :

インフォーマントは全ての身体部位接尾辞を運用できるわけではない。インフォーマントは、「『身体部位に関する言葉』があまり得意ではない」と述べ、「より年上の話者ならば、もっと知っているだろう」と報告した。表 6 の中で、語基の形で出てきている *yezemýa*- (‘頬を叩く’)、*yezeḫláksi*- (‘顎を叩く’)、*yespig*- (‘脛を叩く’) については、「聞いたことがあると思うが、意味は分からない」と述べた。

観察 2 :

多くの身体部位接尾辞の後ろには、-[*u*]*d* という接尾辞が付いている。Bach (1990: 117,119) と Vink (1977: 130) は、-*d* と -*ud* の 2 つを起動接尾辞 (inchoative suffix) として挙げている。表 6 の中で -[*u*]*d* が付いた形で出てきた例は全て -[*u*]*d* なしでは言えないとインフォーマントに判断された。本稿では、この接尾辞を起動接尾辞 (INCH) として扱うことにしている。

観察 3 :

一部の身体部位接尾辞の end effect が先行研究の記述と異なっている。*yezeḫláksi*- (‘顎を叩く’) と *yezeḫduenḷ* (‘彼(女)は私の首を叩いた’) では、身体部位接尾辞は有声化接尾辞かのように語根末の /s/ を /z/ に変えている。*yečkanauduenḷ* (‘彼(女)が私の腕/手/手の指を叩いた’) では、身体部位接尾辞は声門化接尾辞かのように語根末の /s/ を /c/ に変えている。インフォーマントは、*yečkanauduenḷ* と *yeskanauduenḷ* の両方とも言えると判断したが、*yečkanauduenḷ* の方が許容性に自信があると報告した。

観察 4 :

表 3 で観察されなかった、または表 3 と多少違う形で観察された身体部位接尾辞がある :

頭 : =an(u) と -lua	胸/肩/腕 : =!sgan(u)	腹 : -ixḷem
口 : -aḡam	股間/性器 : =aḡ	歯 : -ksgen

インフォーマントは、胸/肩/腕の =!sgan(u) が「上半身」という意味でも使えると報告した。

観察 5 :

表 3 に出ていた一部の身体部位接尾辞は違う意味で使われており、インフォーマントは一部の接尾辞の意味に関して多少の揺れがあることを報告した。例えば、「鼻」の =*isba* は、最初に ‘足’ という意味であると述べたが、後で ‘鼻’ という意味であると報告し、最終的には、どちらかと言えば ‘足’ を意味していると述べた。また、「股間/性器の」の =*aḡi* は ‘女性器’ で、=*aḡ* は男女を問わず ‘股間/性器’ であり、「陰茎」の -*seḡu* は ‘男性の股間/男性器全体’ であると報告した。

観察 6:

インフォーマントは、集めた文の英訳について、「my 〜」は不自然であるため、「me in/on the 〜」と訳す必要があると何度も強く指摘した。

最後に、インフォーマントが *yes-* と共起した際、未知であった表 3 の接尾辞をまとめる:

表 8: インフォーマントが未知であった表 3 の身体部位接尾辞

身体部位	接尾辞	身体部位	接尾辞
頭	-čuaqia/-qia/-sġem/-sem/-zem	襟首	-sgeṇi/-sen(i)
顔	-sġem/-sem/-zem	肩/腕	-xina/-xena
額	-[g]iu	腹	-λems
耳	=atu	股間/性器	-aq
頬	-biu	膝 (knee/lap)	-x̄damua
口	-x̄d	体(全体)	-sen/-[g]it/-ken
歯	-ksi'a	体の一側面	-kut

さらに、*yes-* の例は、例えば次のような文も出た:

- (6) sas yesémdiḡde'u ha
 sa =s yes -ém -d -iḡd -e ='u ha
 AUX.PQ =2.SBJ 叩く -LS.顔 -INCH -DES -EP =3.MED.OBJ QP
 ‘貴方は彼(女)(MED)の顔を叩きたいのか?’

- (7) yesémden saḡḡ
 yes -ém -d -e =n saḡḡ
 叩く -LS.顔 -INCH -EP =1SG.SBJ PN.REFL
 ‘私は自分の顔を叩い(てしまっ)た’

また、次の文は、‘彼(女)(MED)は手で私を叩いた’ という意味で言えないと判断された:

- (8) yečkanaudentḡ
 yes -skana -ud =u =enḡ
 叩く -LS.手 -INCH =3.MED.SBJ =1SG.OBJ
 * ‘彼(女)(MED)は手で私を叩いた。’

そして、次の 2 つの文に関しては、(9a) は言えるが、(9b) は、言えないと判断された:

- (9)⁶ a. qácuk^wsu yíyesemd bíbeg^wanema^{x̃}u
qácuk^w =su yí- -yes -em -d bí- -beg^wanem -a^{x̃}u
AUX.好き =3.MED.SBJ PRED -叩く -LS.顔 -INCH PRED -人 -DEIX.MED
‘彼(女)(MED)はあの人たちの顔を叩くのが好きだ。’

- b. *qácuk^wsu yíyesemd
qácuk^w =su yí- -yes -em -d
AUX.好き =3.MED.SBJ PRED -叩く -LS.顔 -INCH
‘彼(女)(MED)は顔を叩くのが好きだ。’

(9b) が言えない理由としては、「誰の顔か分からないから」との報告があった⁷。次に、yes-以外の語根の例を見ていく。

4.1 yes- 以外の語根の例

表 5 に載っている yes- 以外の語根は、語根によって一例しか出ていないものもあれば、幾つかの例が出たものもある。次の表には、語根毎に最低限 1 例を載せ、後の考察にとって重要な例を全て載せる：

表 9 : yes- (‘(何かで)～を叩く’) 以外の語根の例

語根	例文
mex- ‘(拳で)殴る’	(10) meksdúduen ^λ mex -sdú -d =u =en ^λ 殴る -LS.目 -INCH =3.MED.SBJ =1SG.OBJ ‘彼(女)(MED)は私の目を殴った。’
demk ^w - ‘蹴る’	(11) démk ^w e ^{x̃} dudi ^{x̃} danug ^w a ^u demk ^w -e - ^{x̃} d -ud -i ^{x̃} d -a =nug ^w a = ^u 蹴る -EP -LS.尻 -INCH -DES -FORM =1SG.SBJ =3.MED.OBJ ‘私は彼(女)(MED)の尻を蹴りたい。’
čem- ‘指す/刺す’	(12) čemsdúduen ^λ čem -sdú -d =u =en ^λ 指す -LS.目 -INCH =3.MED.SBJ =1SG.OBJ ‘彼(女)(MED)は私の目を刺した。’
duq ^w - ‘見る’	(13) dú ^{x̃} sdudu ^u duq ^w -sdu -d =u = ^u 見る -LS.目 -INCH =3.MED.SBJ =3.MED.OBJ ‘彼(女)(MED)は彼(女)(MED)の目を見つめている。’
q ^w et- ‘痒い’	(14) ^u apáns q ^w et ^λ skana ^u apá =n =s q ^w et -skana AUX.とても =1SG.SBJ =PREP 痒い -LS.手 ‘私の手はとても痒い。’

⁶ (9a-b)では言い間違えとして、3 人称中称の直接目的語人称接語である =u の代わりに、3 人称中称の間接目的語人称接語である =su が使われていると考えられる。

⁷ (9b) が許容されなかった理由としては、本動詞の方で (部分重複により形成された) 複数形を使ってしまったことも考えられる。

<p><i>q^wet-</i> ‘くっ付く’</p>	<p>(15) <i>q^weckanasu</i> <i>q^wet</i> <i>-skana</i> =su くっ付く -LS.手 =2.SBJ ‘貴方の手には何かがかくっ付いている。’</p> <p>(16) <i>q^wetēx̄d-</i> <i>q^wet</i> <i>-e</i> <i>-x̄d</i> くっ付く -EP -LS.尻 ‘(パンツなどが) 尻にくっ付く’</p>
<p><i>muk^w-</i> ‘結び付ける’</p>	<p>(17) <i>múk^weṁu-</i> <i>múk^w</i> <i>-e</i> <i>-x̄u</i> 結び付ける -EP -LS.首 ‘首の回りに(ネクタイなどを)結び付ける’/‘首吊りで自殺する’</p>
<p><i>λup-</i> ‘火傷する’</p>	<p>(18) <i>λúpskanu</i> <i>λúp</i> <i>-skana</i> =u 火傷する -LS.手 =3.MED.SBJ ‘彼(女)(MED)は(自分の)手を火傷させた。’</p> <p>(19) <i>λúpskanatuenλ</i> <i>λúp</i> <i>-skana</i> <i>-t</i> =u =enλ 火傷する -LS.手 -PAST =3.MED.SBJ =1SG.OBJ ‘彼(女)(MED)は私の手を火傷させた。’</p>
<p><i>kup-</i> ‘細長い物を切る/折る/壊す’</p>	<p>(20) <i>silí kúpeṁu ha</i> <i>sil</i> =i <i>kúp</i> <i>-e</i> <i>-x̄u</i> <i>ha</i> AUX.PQ =3.DIS.SBJ 折る -EP -LS.首 QP ‘彼(女)(DIS)は(自分の)首(の骨)を折ったのか?’</p> <p>(21) <i>sas kúpeṁut’i ha</i> <i>sa</i> =s <i>kúp</i> <i>-e</i> <i>-x̄u</i> <i>-t</i> =’i <i>ha</i> AUX.PQ =2.SBJ 折る -EP -LS.首 -PAST =3.DIS.OBJ QP ‘貴方は彼(女)(DIS)の首(の骨)を折ったのか?’</p> <p>(22) <i>kúpeṁutnug^wa’u</i> <i>kúp</i> <i>-e</i> <i>-x̄u</i> <i>-t</i> =nug^wa =’u 折る -EP -LS.首 -PAST =1SG.SBJ =3.MED.OBJ ‘私は彼(女)(MED)の首(の骨)を折った。’</p>

5 データについての考察

本稿では、第4章で提示したデータについて考察を行う。

5.1 インフォーマントが運用している身体部位接尾辞について

前述したように、インフォーマントが表3に載っていた身体部位接尾辞を全て知っているわけではなく、多少違う意味で使う場合がある。さらに、先行研究で観察されなかった接尾辞も観察された。これらの接尾辞について次のことを指摘したい：

- I) インフォーマントが使っていた *=aḡ* (‘女性の股間/性器’) と *-ixlem* (‘腹’) は、表 3 の *=aq* (‘股間/性器’) と *-lems* (‘腹’) と意味上も形式上もとても似ているため、何らかの異形態であることなどで説明できるかもしれない。また、*-ixlem* (‘腹’) の冒頭の *i* について更に探してみれば、後の口蓋化した子音である *x* ([x]) の影響を受けて [i] の音色を持った挿入母音である可能性もあると考えられる。
- II) インフォーマントが使っていた *=!sgan(u)* (‘胸/肩/腕/上半身’) は、*-sgeni* (‘襟首’) とは意味的に少し離れてはいるが、この場合も形式が似ている。
- III) インフォーマントが「頭」の身体部位接尾辞として使っていた *-lua* という形は、語根の方で *end effect* 或いはその他の規則的な形態音韻論的な変化しか生じていない前提で考えたが、仮に *yes-* の語根末の /s/ が何らかの理由でなくなったと想定すれば、先行研究の *-ćuaqia* (‘頭’) の前半部分に近い *-ćua* (*end effect* が不明) という形として分析できる。
- IV) インフォーマントが「口」の身体部位接尾辞として使っていた *-aḡam* は、先行研究で見つかる *-ḡem* (‘前に/で’ 英: ‘in front’ Bach 1990: 115) と似ているが、関係があるかどうかは現時点で分からない。

インフォーマントは、自身は「身体部位に関する言葉」に詳しくないと何度も報告した。本人の報告によれば、自身と前の世代の話者とは話しているハイスラ語が大きく異なり、前の世代の話者の方が「身体部位に関する言葉」により精通している。このようなコメントはハイスラ語の別の文法現象である複数性に関しても、同じインフォーマントから得られた (Vattukumpu 2018: 57)。従って、知らない身体部位接尾辞があることは、言葉遣いに関する世代差の現れの 1 つかもしれない。

5.2 *end effect* について

観察 3 で示したように、表 6 の中には、*end effect* が先行研究通りに生じない例があった。*yezeḡuduenḡ* (‘彼(女)(MED)は私の首を叩いた’) の例で、‘首’を表す身体接尾辞は、語根末の子音で先行研究の記述と違って有声化の *end effect* を生じさせているが、(17)、(20)、(21)、(22) の例で、同じ接尾辞は先行研究通りに声門化の *end effect* を生じさせているため、インフォーマントはほとんどの場合に、*-!ḡu* (‘首’) を声門化接尾辞として使っていると言えよう。

‘手’を表す身体接尾辞 (*-[s]kana*) は、表 6 に載っている例以外に、声門化を生じさせている例がないため、この場合もほとんど先行研究通りに *end effect* が生じていると言えよう。*yezeḡlaksi-* (‘顎を叩く’) に関して言えば、意味は分からないが聞いたことはあるとの報告があったため、言い間違えの可能性も否定できないだろう。*end effect* に関する多少の不統一性も話者世代差によるものである可能性があると考えられる。

5.3 身体部位接尾辞の意味役割及び変化を伴う他動詞について

身体部位接尾辞が担える意味役割に関して言えば、(8) で見たように、身体部位接尾辞が表す身体部位の意味役割が道具 (*instrument*) であると解釈される文は非文となるため、ハイスラ語の身体部位接尾辞は道具の意味役割を担うことができないということが示唆される。このような非文の例はもう 1 つある。この例は、‘彼(女)(MED)は手で私を殴った’ という意味で言えず、‘彼(女)(MED)は私の手を殴った’ という解釈しかできない：

(23) mekskanaudentɿ

mex -skana -ud =u =enɿ
 殴る -LS.手 -INCH =3.MED.SBJ =1SG.OBJ
 * '彼(女)(MED)が手で私を殴った'

また、前に述べたように、先行研究における身体部位接尾辞の例は、身体部位接尾辞が付いた変化を伴う他動詞は再帰的にしか使えないことを示唆している。要するに、先行研究からは、身体部位接尾辞が表す身体部位の所有者の意味役割が被動者 (patient) でありながら、動作主 (agent) と同一人物ではないという使い方もあるということが読み取れない。しかし、(19)、(21)、(22) の例文から分かるように、そのような身体部位接尾辞の使い方は実際にできるのである。

6 まとめ

前述のデータに関する観察・考察を次のようにまとめる：

- ① インフォーマントは先行研究から参照した表 3 の身体部位接尾辞のほとんどを知っている。また、先行研究で観察されなかった身体部位接尾辞を使っているが、先行研究で観察された接尾辞と似ているものがあることが分かった。未知の身体部位接尾辞があることについては、話者の世代差によるかもしれない。
- ② インフォーマントが表 3 の身体部位接尾辞を使う時に end effect は概ね先行研究の記述通りに生じるが、違う例も多少ある。
- ③ 身体部位接尾辞が表す身体部位の意味役割としては、道具が不可能である可能性があると考えている。また、先行研究から予想できなかった観察としては、身体部位接尾辞が付いた変化を伴う他動詞は非再帰的にも使えることが分かった。

7 問題点と今後の課題

現時点残っている問題点としては、例えば次のものが挙げられる：

- ① 起動接尾辞として扱ってきた *-[u]d* と身体部位接尾辞の関係はまだ把握できていない。この接尾辞と共起せずに生起した身体部位接尾辞もあるため、共起する場合としない場合の両方あり得るが、規則性については不明である。
- ② 本稿は、身体部位接尾辞と動詞の関係性にのみ着目したが、名詞に付くこともあるかもしれない。
- ③ 先行研究 (特に辞書) から観察される身体部位接尾辞の例は網羅できていない。今後、反例を含めた網羅的な調査が必要である。
- ④ データは 1 名のインフォーマントから得たものであり、実例数が少ない。

今後の課題としては、第一に先行研究が報告する身体部位接尾辞の例を徹底的に調べることである。これまで見た限りでは、先行研究の辞書の中では、例えば *-[u]d* を伴う身体部位接尾辞を含む見出し語が多く見られるため、参考資料として期待できる。また、身体部位接尾辞が付いた名詞も出てくる可能性がある。

略号一覧

-	形態素境界	LS	語彙的接尾辞
=	接語境界 / 有声化接尾辞	MED	中称
-!	声門化接尾辞	OBJ	目的語
1	一人称	PAST	過去
2	二人称	POSS	所有接尾辞
3	三人称	PQ	極性疑問
AUX	助動詞	PROX	近称
DEIX	直示	PN	代名詞
DES	希望法	PRED	部分重複
DIS	遠称	PREP	前置詞
EP	挿入音	QP	疑問小辞
FORM	形式的形態素	REFL	再帰
FUT	未来	SBJ	主語
INCH	起動	SG	単数

謝辞

本稿の言語データを提供して下さったインフォーマントである Nelson Grant 氏に心より感謝を申し上げる。また、本稿にコメントを下さった鴨井修平氏（同志社大学）と鄭雅云氏（京都大学）にも感謝しております。なお、本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金 (#19J14298) から助成を受けています。

参考文献・資料

- Bach, Emmon (1990) *A Haisla book*. Unpublished draft.
- Bach, Emmon (1995) A note on quantification and blankets in Haisla. In: Emmon Bach, Eloise Jelinek, Angelika Kratzer and Barbara H. Partee (eds.) *Quantification in Natural Languages* 13-20. Dordrecht: Kluwer.
- Bach, Emmon (2001a) Building words in Haisla. *University of Massachusetts Occasional Publications* 20: 51-73.
- Bach, Emmon (2001b) *English – Haisla Dictionary*. Unpublished draft.
- Kazama, Shinjiro (2011) Are there lexical affixes in Tungusic, or what is the lexical affix? *Linguistic Typology of the North* 2: 55-66.
- Lincoln, Neville J. and Rath, John C. (1986a) *Phonology, Dictionary and Listing of Roots and Lexical Derivates of the Haisla Language of Kitlope and Kitimaat [sic], B.C. Volume 1. Canadian Ethnology Service Paper* 103. Ottawa, ON: National Museum of Canada.
- Lincoln, Neville J. and Rath, John C. (1986b) *Phonology, Dictionary and Listing of Roots and Lexical Derivates of the Haisla Language of Kitlope and Kitimaat [sic], B.C. Volume 2. Canadian Ethnology Service Paper* 103. Ottawa, ON: National Museum of Canada.
- Mithun, Marianne (1997) Lexical affixes and morphological typology. In: J. Bybee, J. Haiman and S. Thompson (eds.) *Essays on language function and language type* 357-372. Amsterdam: Benjamins.

- Muro, Alessio (2008) Lexical Affixation in Salish and Wakashan and its Relevance for a Theory of Polysynthesis. *Padua Working Papers in Linguistics* 2: 1-28.
- Vattukumpu, Tero (2018) Notes on reduplication in the Haisla language — Partial reduplication of the negative auxiliary verb. *Kyoto University Linguistic Research* 37: 41-60.
- Vink, Hein (1977) A Haisla phonology. *International Conference on Salish Languages* 12: 111-131.

【付属資料】

【本稿の表記法】

子音音素：

/p:/	⟨b⟩	/pʰ:/	⟨p⟩	/pʷ:/	⟨p̥⟩	/k:/	⟨g⟩	/kʰ:/	⟨k⟩	/kʷ:/	⟨k̥⟩	/ʔ:/	⟨ʔ⟩
/t:/	⟨d⟩	/tʰ:/	⟨t⟩	/tʷ:/	⟨t̥⟩	/kʷ:/	⟨gʷ⟩	/kʷʰ:/	⟨kʷ⟩	/kʷʷ:/	⟨k̥ʷ⟩	/h:/	⟨h⟩
/ts:/	⟨z⟩	/tsʰ:/	⟨c⟩	/tsʷ:/	⟨c̥⟩	/q:/	⟨ḡ⟩	/qʰ:/	⟨q⟩	/qʷ:/	⟨q̥⟩	/s:/	⟨s⟩
/tʰ:/	⟨λ⟩	/tʰʰ:/	⟨λ̥⟩	/tʰʷ:/	⟨λ̥̥⟩	/qʷ:/	⟨ḡʷ⟩	/qʷʰ:/	⟨qʷ⟩	/qʷʷ:/	⟨q̥ʷ⟩	/ʈ:/	⟨ʈ⟩
/m:/	⟨m⟩	/mʷ:/	⟨m̥⟩	/w:/	⟨w⟩	/wʷ:/	⟨w̥⟩	/x:/	⟨x⟩	/χ:/	⟨x̥⟩	/l:/	⟨l⟩
/n:/	⟨n⟩	/nʷ:/	⟨n̥⟩	/j:/	⟨y⟩	/jʷ:/	⟨y̥⟩	/xʷ:/	⟨xʷ⟩	/χʷ:/	⟨x̥ʷ⟩	/lʷ:/	⟨l̥⟩

※ 子音音素の主な異音変異 (allophonic variation)：

/p:/	[p ~ b]	/t:/	[t ~ d]	/k:/	[kʲ ~ gʲ]	/kʷ:/	[kʷ ~ gʷ]
/q:/	[q ~ ɕ]	/qʷ:/	[qʷ ~ ɕʷ]	/ts:/	[ts ~ dz]	/tʰ:/	[tʰ ~ dʰ]

母音音素：

/i:/	⟨i⟩	/a:/	⟨a⟩	/u:/	⟨u⟩
------	-----	------	-----	------	-----

※ 母音音素の主な異音変異 (allophonic variation)：

/i/ → [eɪ] / [+uvular/glottal] ____ /u/ → [ou] / [+uvular/glottal] ____

その他：

⟨e⟩ = シュワー ⟨ʔ⟩ = アクセント

【直接法における主語・直接目的語の人称接語】

主語の人称接語

	単数	複数
一人称	$=n / =nug^w a$	$=nux^w$ (除外的) $=nis$ (包括的)
二人称	$=su$	
三人称 – 近称	$=ix$	
三人称 – 中称	$=u$	
三人称 – 遠称	$=i$	
三人称 – 欠称	$=gi$	

※ 一人称単数の主語の人称接語は 2 つの異形態がある。助動詞に付くのは、 $=n$ のみであるが、それ以外の環境では自由変異の関係にある。

直接目的語の人称接語

	単数	複数
一人称・除外的	$=en\lambda(a)$	$=en\lambda anux^w$ (除外的) $=en\lambda anis$ (包括的)
二人称	$=u\lambda(a)$	
三人称 – 近称	$=ix / =e\bar{x}g$	
三人称 – 中称	$=u$	
三人称 – 遠称	$=i$	
三人称 – 欠称	$=e\bar{x}gi$	

※ 筆者のデータの中には、三人称・欠称複数の直接目的語の人称接語として、先行研究の記述でこれまでに見えていない $=i'e\bar{x}gi$ という生産性が低い接語も見られるが、この接語の振る舞いに関する詳細は不明であるため、表の中に入れていない。

受理日 2020 年 4 月 15 日